

真つ白で無機質な大地の所々から、淡い紫色の光球のようなものが音もなく滲み出、柔らかな軌道で空中に浮かび上がっては空を覆う靄に溶けて混ざっていく。徐々に徐々に厚みを増していくそのヴェールの向こう側で浮かぶ巨大な球体は、さながら暗夜の雲に隠れた月のようにひどく不明瞭な光をたたえていた。

仰向けに倒れた上体で覚醒した男は、緩慢な動きで上体を起こすと二、三度目を擦り、視界に入る光景が寝ぼけ眼のせいでないことを確認した。同時に、自身の体への違和感に気づく。『軽い』。両手両足に縛り付けられた錘を外されたような開放感に驚き戸惑った。目の前に広がる不思議な光景、納得しがたい肉体の感覚、理解が追いつかない状況の連続に追いつかない思考が巡っては霧散した。まとまらない考えの中で、男の脳内では一つの言葉だけがはっきりと響いていた。

—こんなはずはない。

あちらこちらから浮かび上がる薄紫の球体は、触れても何の感触もないままに体をすり抜け、空に溶け込んでいった。あてもないまま歩き始めた当初は、目の前に浮かんできたそれに驚いて足を止めたり、避けたりしていたが、その存在に慣れてからは意にも介さなくなっていた。精細な視界には果てなく続く地面と紫がかった空しか映らず、後ろを振り返っても、どの方向から歩いて来たのかすらわからなくなるほどに変化のない情景だけが広がっている。

空模様は依然厚い靄がかかったままで、先ほどまでは光の漏れ方で形状がはっきりと見て取れた

月のような球体も、靄の濃度が高くなった今ではかろうじてその位置がわかる程度におぼろげなしか認識できない。光源が弱くなったにもかかわらず、視界の明瞭さはさほど失われておらず、見通せる範囲は狭まることはなかった。

どれほど歩いただろうか。どういうわけか眠気、疲れ、空腹感といったものを全く感じないまま進み続けるうち、時間の感覚さえも失っていた。変わりばえのない景色を歩き続けるうち、両足が機械的に大地を踏み蹴る音だけが、無に近づいた意識や思考をかるうじて繋ぎとめるように耳に届いていた。ふと地平線の果てを見やると、米粒ほどにしか見えないが、今までとは違う何かが存在しているのを見つけた。あまりに遠すぎてそれが何かは判別できない。しかし、確かに目に入るその違和感は、停止していた思考を再度巡らせるための呼び水としては十分すぎるものだった。無意識のうちに、足を動かす速度も自然と早まる。近づくほどにその違和感の源は輪郭を鮮明にさせた。「—やあ、どうも」

男の姿を捉えたそれは、軽い調子で話しかけてきた。言葉を交わせそうな相手を見つけた安堵感と、生き物と呼ぶにはあまりにも異様なその姿への驚きに、返すべき言葉を紡ぎ出せないまま、音を発さぬ口が間抜けな動きを繰り返す。

上半身はいわゆる人間そのもの。顔から年齢を察するならば、五十歳前後というところだろうか。顔に刻まれた深い皺と、豊かにたくわえた顎ひげにぽつぽつと混じる白毛が、一層見た目の年齢を高く見せている。輪郭ががっしりとした肩幅が、壮年と呼ぶのを躊躇させるかのように存在を主張していた。

「この姿に驚いているようだが、ここに来てから誰かと話すのは始めてかい」

野太いが穏やかな調子で話しかけてくる相手の下半身は、地面と同化していた。腰から下は今踏

みしめているこの大地のように、血肉を感じさせぬ無機質な岩石へと変質して溶け合い、果てなく続くこの白色の大地と一体化している。腰ほどの高さの台座に人の上半身を無造作に置いたような、あまりにも異様なその生物に、男は驚愕を隠せないまま頷くことしかできなかつた。

俄かには信じられなかつた。目の前にいる男が語った内容は、この奇妙な世界に馴染みかけていた思考を想像以上に揺さぶるものだった。しかし、その話を土台にして考えるといま自分が置かれている状況と、自らの体の拭い去れぬ違和感にも合点がいく。

この異質な空間は、言うなれば死後の世界。生命活動を終えた肉体から離れた人間の意識は、その死因に関係なく平等にこの場所に行き着くという。どうやら彼も別の誰かからこの世界の在りようを聞いたらしい。

その内容に衝撃はあつた。だが、全く想像していないわけではなかつた。男が思い出せる最後の記憶は、動かそうと思つてもほとんど動かない自分の全身と、目の前に広がる真っ白な天井。薄っすらと意識だけはあるが、生きているというより生かされている、そんな自分の情けない姿だった。時折家族が見舞いに来たり、看護婦や医師が定期的に様子を確認したりしている光景をまどろんだ意識の中で見ていた。そんな自分の体が何の不都合もなく動くはずがないからだ。

「この場所については分かりました。しかし、その体は……」

先ほどから気になつていた疑問を目の前の男性にぶつける。話をしている間にも少しずつだが、ゆっくり確実に男の石化は進行していた。邂逅直後は腰骨のあたりまでだったそれは今や肋骨に触れそうな位置まで侵食していた。彼は一度自分の体に目をやり、寂しそうな笑みで小さくため息を

つくと、ぽつぽつと語り始めた。

「この世界に来てしばらくすると、徐々に記憶が失われていくんだ。最初の思い出、幼い頃の記憶から順番に消えていく。消えた記憶の割合に応じて、こうして体が地面と一体化していくんだよ」  
もう彼の体の半分以上が変化している。単純に考えればこの状態の時点で記憶の半分は失われているということになる。

—記憶の半分、自身の半生を失うという感覚を想像して、男の胸に何ともいえない寂しさが渦巻いた。記憶は自分の生きてきた証明のようなもの。それがジワジワと消えていくというのは、ある意味では自分が消えるのと同義に思えた。表情に出ていたのか、そんな考えを見透かすように彼は言葉を続ける。

「ご覧の通り、私の記憶は大体半分、生まれてから三十年ほどは失われている。子供の頃や、若かった頃の両親との思い出はもう思い出せない。妻と子供がいたのは覚えているが、妻との出会いや、子供が生まれた時期の記憶は完全に消えてしまった。子供が巣立っていった寂しさや、妻に先立たれた悲しみと喪失感は思い出せるのに、ね」

搾り出すようにそう呟いた彼の表情は、このうえなく切なく寂しそうだった。人生は後の方になるほど悲しい記憶が多くなる。何もかもが新鮮で楽しく輝いていた時間から忘れていくのに、辛く悲しい事が多い時期の記憶ほど後まで残ってしまう。その気持ちを想像すればするほど湧き上がる物悲しさに、自然と彼とよく似た表情になってしまっていた。それを察したのか、沈んだ空気を払拭するように、努めて明るいついで話を続けた。

「話が逸れてしまったね。記憶が全て失われると、肉体は大地と完全に一体化する。地面から立ちのぼる淡い球は、記憶を洗い流された人間の魂の欠片のようなものなのさ」

その後ほとりとめない話を続けていたが、然程時間も経たないうちに彼の石化が進行し、完全に地面と同化してしまった。話し相手がいなくなった今、男はその場から動こうとはしなかった。先ほどの男性の石化の進行速度を考えると、おそらく自分に残された時間はそう多くはない。今から歩き始めた所で、自身の石化が始まるまでに会話の出来る人間と出会える可能性は限りなく低い。状況が理解できないままに全てを失っていく人も少なくないであろう中、この世界に関する知識を得られただけでも幸運と考えていた。

もう輪郭がなくなりかけている薄れた月を見上げながら、男は自身の記憶を必死で掘り起こす。これから消えるとわかっているからか、良いことばかりではない過去の記憶が、やけに懐かしく儚く思えた。

―きつと彼も、今の自分と同じだったのだろう。ふとそんな考えが頭をよぎった。自分と同じように、この世界における自身の行く末を知ったからこそ、可能な限り記憶を呼び起こしていたのだ。何もわからないうちに記憶が消えてしまっていたのなら、きつとこんなに切ない気持ちにはならないのだから。

足元に目をやると、いつの間にか指先から地面と融合しはじめていた。もう幼い頃の自分や家族の姿が、すっぽりと抜け落ちたように思い出せなくなっている。来るべき時が来ただけと頭では理解していても、瞼が焼けるように熱くなるのを止められなかった。

失われていく記憶とともに、肉体も徐々に大地の一部になっていく。足首まで完全に石化した頃、遠くで何かが動いたような気がした。地面から浮かび上がる球以外で、この世界で動くものは一つ

しかない。

話ができる距離まで近づく頃には、おそらく腰あたりまで一体化してしまうだろう。この姿を見た相手の反応が容易に想像がつく。きつと、あの男性を見た自分と同じように驚いた顔をするのだろうか。男はこの世界で目覚めて以降、始めての笑いをこぼした。

近づいてくるにつれて、地面を踏みしめる足音が耳に届き始める。向こうもこちらに気づいたのか、確実にこちらに向かって歩を進めていた。石化は依然進行しているが、ある程度の会話をする時間はあるだろう。

男の姿を見て、案の定驚いた表情を浮かべたその人が足を止めたのは、奇しくも先ほどまで会話していた男性が大地と化した位置だった。男は静かに語りかける。

「―やあ、どうも」